

酷暑を乗り切って「熱い演技」の数々

第五十六回医家邦楽祭を見る

歌舞伎座新築工事の影響も

あつて日本医家芸術クラブ伝統の「邦楽祭」も来季はお休みです。その理由からも邦楽部員にとっては、普段の年より力の入る舞台となりました。その熱演の数々を評論家の宮西芳緒氏によつて、以下に紹介してもらいました。

評 邦楽評論家 宮西芳緒

平成二十二年の夏は異常だった。室内にいても夜でも熱中症が続出、盛んに省エネやエコが叫ばれる一方で、エアコンは切らないようにと連日報道された。歳の瀬に清水寺の舞台から中継される「今年の漢字」では、政治・経済の混迷を抑えて「暑」の一字が同寺の森清範貫主に

よつて揮毫された。各地で数々の記録を更新した酷暑の夏を乗り切つて稽古を積んで来られた御出演の先生方によつて、この日の舞台は一人感慨深いものとなつたに違いない。

その平成二十二年、例年の通り十一月二十三日、勤労感謝の日の日本橋三越劇場で、日本医家芸術クラブ邦楽部の主催する「医家邦楽祭」は、第五十六回を数えて開催された。



同クラブ委員長・太田怜先生が幕前に登場(写真⑥)しての「開会のことば」は、

スポーツでも観客の声援に支えられる要素は大きいもので、自分たちはアマチュアの芸だが……だからこそ……」「いままで倍して皆様の御声援をいただきました」と観客に語りかける。

一、舞囃子(観世流)『玄象』

医家邦楽祭の開幕の顔としてすつかり定着した沢田又二先生(横浜市、耳鼻咽喉科)の大鼓と梅津浄子氏のシテによる一番で、横浜市医師会謡曲部の出演だが、今回はあいにく故障者が多く、地謡は北村みよし氏が(囃子)方の助声を得ながら一人を務める。

「玄象」とは醍醐天皇の御世に「青山」「獅子丸」とともに中国から伝えられた琵琶の名器(曲中、村上天皇の霊が龍神に命じて龍宮より取り寄せ、藤原師長に授けるのは「獅子丸」だが)。沢田先生の銜のないリードで、シテ(村上天皇の霊)は爽やかな早舞を漖みなく、淡々と演じ納めた。龍神を従える村上天皇のス

ケールの大きな物語に想いを馳せる。

(写真⑥ 1番「玄象」)



↓ 3番 長唄『外記猿』 秋葉則子 ↑ 2番 長唄『岸の柳』 吉野則子



二、長唄『岸の柳』
今回が三越劇場での初舞台、次の幕に

出演される秋葉先生の誘いで「意を決して出演を決めたもの……」と謙遜される吉野則子先生（浦安市、内・小児科）は今藤美治郎師ほかと三味線を演奏する。唄は杵屋秀子師ほか。明治六年に東西国の貸席で行なわれた浴衣ざらいに発表された曲。

「日本舞踊を習い始めて最初に踊った思い出のこの曲を三味線でも披露出来て、大変嬉しく思います」と吉野先生。夏の隅田川から両国の賑わいなど、後半に行くほどよく揃って涼やかな一幕となった。

三、長唄『外記猿』

続く秋葉則子先生（八千代市、内科）も今藤美治郎師ほかと三味線を披露、杵屋秀子師ほかの唄・日がな一日小猿を「背負って歩き、・猿の小舞」を見せる猿曳の風俗を軽妙に聞かせる内容で、『傀儡師』『石橋』『翁千歳三番叟』とともに外記節復活を願って作られた曲。

前年の『吾妻八景』に引き続きの出

演となる秋葉先生は「充分な稽古ができず、師匠方には心配をおかけしました」と語るが、気持ちを込めて丁寧な、落ち着いた演奏を聞かせた。

四、舞踊・常磐津『廓八景』

山梨県立中央病院と山梨厚生病院の名誉院長でもあり、なお現役で医療を行なわれている飯田文良先生（笛吹市、外科



写真①は、花柳和之城の名前を持って日本舞踊を嗜むだけでなく、趣味は広く、この年末年始には山梨県立美術館で絵と

書の個展を開かれた由。

今回も袴付の素踊りで、拙き絃の調べ替えから、瀬田の夕照いまここに、夕暮照らす仲の町」など近江八景に準えて吉原の四季を綴る一曲。振りのひとつひとつを克明に、いつに変わらぬ矍鑠とした舞台姿を印象つけた。

五、長唄『靱猿』

杵屋勝・に子こと山崎律子先生（台東区、皮膚科）、日吉小間蔵師ほかの唄、杵屋勝国師ほかの三味線で、囃子（笛、小鼓、大鼓、太鼓）が入る。

山崎先生はこの年、国立劇場や浅草公会堂にも出演、長唄だけでなく舞踊も披露されている。この『靱猿』は芝居の『靱猿』（常磐津）から離れて長唄で聞かせる一曲。猿曳と子猿の奇禍と情愛を、「一生懸命楽しく演じたい」という抱負の通り、しっかりととした声で描き切る。

格調を整えた唄い出し、せりふから唄に渡す自然さ、打ち殺される鞭とは知ら



ず無心に船漕ぐ真似をする子猿の哀れから、救かつて猿に舞を舞わせて、めでたく結ぶ段切れへと、スムーズに心地よく盛り上がり、拍手を集めた。

写真②
5番 長唄
『靱猿』

六、小唄四題

咲村鈴音こと川口蚊子先生（江東区、



看護科)の三味線で計八題が上演される小唄の、そのパート一。ところが『中州の思い出』

と『佃の渡し』を唄う予定だった宮田さた氏が夏から体調を崩された由、「舞台を空けないために」と川口先生(写真⑥)が、いつもの三味線だけでなく御自身の喉も披露された。さりげなく穏やかな糸と唄で、静かな情緒が湛えられた。



『仲町育ち』と『河太郎』は加藤俊男氏(写真⑦)の唄で粋な仲町の賑わいと、いい機嫌で・小

夜ふけて、月に遠音の村囃子」に浮かれる河童の姿を描く。さらりとノッてゆく糸の楽しさに耳を傾ける。

七、謡曲(宝生流)『鞍馬天狗』

平野宏先生、近藤智雄先生、佐藤明德先生(いずれも練馬区、外科)の三人で謡を務める予定が、平野先生と近藤先生が生憎と出演が出来なくなり、佐藤先生



(写真⑧)がひとりで舞台を務めることに。鞍馬山に預けられた権児

(牛若…のちの源義経)の前に山伏に姿を借りた大天狗が現われ、連れ立って桜を眺め、兵法を授け、守護を約束する、まさしく判官びいきの雄大な物語が描かれる。

八、小唄四題

六、に続いて川口蚊子先生の三味線によるパート二。



鈴木總明氏(写真⑨)は「邦楽祭で活気ある祭りの小唄を、一度は唄ってみたい」という思いから『江戸祭り』を、そしてもう一曲は「鶴八鶴次郎」から、われから捨てし恋なれど」涙をこらえてほろ苦い盃を干す『心して』



邦楽祭には久々の登場

となった渡辺進氏(写真⑩)は「明鳥」の纏綿とした芝居を聞かせる『川竹』と、伊達も喧嘩も江戸の花」と、清元から採ったいなせで華やかな『神田祭』を唄

う。川口先生の暖かい糸が、優しく、それぞれに唄い手を包んでいる。

九、長唄『雨の四季』 (写真⑤)

杵屋正澄己こと高橋妙子先生(中央区、耳鼻咽喉科)、杵屋正園師ほかの三味線稀音家康三郎師ほかの唄で、囃子(笛、小鼓、大鼓、太鼓ほか)が入る。

「この曲が大好き」という高橋先生は平成十二年、第四十七回の邦楽祭でも『雨の四季』を上演されている。そのときは踊りの師匠である藤間藤三郎師の振付で、もう一人の師匠・藤間藤朱師と先輩の裕麻師の立方の地を、高橋先生は務めている。

・音もなく降るとも見えぬ春雨」に始まり、物売りの軽快な、次第にノッて行く楽しさ、がらり変わって・それそのいた長刀ながたな」と武張ぶぢって見せ、多彩な鳴物とともに様々な情景を次々に描いてやがて・聞くだに寒き冬の雨」と暮を切る。知的な近代の香りを纏っている。



十、仕舞(喜多流)『熊坂』

七、の謡曲『鞍馬天狗』のメンパーとは「病院のお仲間」であり、毎回邦楽祭で仕舞を披露されている鈴木浩之先生(練馬区、外科)写真⑥が、今回はそのお仲間による『鞍馬天狗』と同じく牛若に因んだ演目『熊坂』を舞う。

牛若に討ち取られた大盗賊・熊坂長範の霊の話で、勇壮な牛若との一騎討ちのありさまに意気込みを見せる。

十一、小唄二題

今回は花柳界をテーマにした小唄二題、『夢の柳橋』と『青いガス燈』を山田新太郎先生(練馬区、整形外科)写真⑦が唄う。三味線は柴小車也師。

・遠音に粹な新内の流しの舟と柳橋の賑わいを、もう一曲は

新橋芸者の想いや銀座の風景を唄う、いわば大正ロマンの世界をひっそりと描いた。

十二、長唄『都風流』

中島信子先生（中央区、眼科⇨写真⑤）



中島先生は「短い曲ですので今回は独吟いたします。低音から高音まで幅広い音

の唄、東音新井康子師ほかの三味線。明治から大正にかけての浅草界隈の風物を夏の隅田川の情景から・歳の市」まで組唄式に綴る。昭和二十二年、第四百回長唄研精会で初演された曲

域が必要ですので一生懸命お稽古をしました」と語る。この曲の持つ新しい感覚が聞こえて来るようだ。

十三、清元

『夕立』

太田怜先生

（目黒区、

循環器科

⇨写真⑥）は、

いつも一緒

に語ってい

た同僚の昔

又淳先生が

休演のため

危うくひと

りで語るこ

とになると

ころ、「私を

清元に引き

ずりこんだ

いまは亡き穂坂博明先輩の奥方とお嬢様

に無理に応援をお願いして」やつと出演の運びとなったという。太田先生と穂坂美和子氏、清元延宗女仁師の浄瑠璃、清元延志左師、穂坂寿和子氏の三味線。いまでは「小猿七之助」の濡れ場の曲として有名な浄瑠璃。

年齢を重ねてころのまま芸に遊ぶ境地に近づかれていますと察するが……「内容はかなり色っぽいもので、にもかかわらず間違いない唄うのが精いっぱい、そのお色気までは唄いこなせないのがまことに残念です」と太田先生は語る。

十四、長唄『多摩川』

東音前村八重子・杵屋和重二こと前村

八重子先生（東村山市、小児科）、東音福

田克也師ほかの唄、杵屋栄敏郎師ほかの

三味線。笛が情緒を添える。

いつもは大曲を披露される前村先生が、以前にもみせてくれた趣向だが、ここでは唄を、そして同じ曲を切十七、に三味線で披露する。毎回、その小柄なお身

体のどこから湧き出てくるのだろうか……
邦楽が好きでたまらないというエネルギーと、真摯な演奏姿に惹きつけられる。
ここではまず大薩摩の懐の広さ、そして
福田師の大きさと艶が素晴らしく、前村
先生のところが映えた。

十五、舞踊・清元『神田祭』

小林勇先生（横浜市、産婦人科）写真
はお得意の女形を素踊りで披露、今回は



清元の名曲『神田祭』を踊る。

江戸の祭の風俗を唄った歌舞伎舞踊の
曲は、赤坂日枝神社の山王祭を描いた『お

祭り（申酉）』と、神田明神の神田祭を描
いたこの『神田祭』が双璧であろう。神
田っ子の気風と下町情緒を湛えた曲を粹
な芸者役でさらりと見せる。いつもなが
らの抑えた艶が滲む。

十六、舞踊・常磐津『松廼羽衣』

尾上菊尚こと大川尚美先生（横浜市、



小児科）の天人、師匠である尾上菊紫郎

師の子息・尾上菊方師の伯了で、三保の
松原の羽衣伝説を描いた作品を上演。

大川先生は尾上菊方師とよく息が合い、
清潔な、尾上流らしい舞台を見せた。彼
方を見送る伯了、そして二段に決まる天
女とが美しい絵面となって幕を切った。

十七、長唄『多摩川』

東音福田克也師ほかの唄、前村八重子
先生写真、柗屋栄敏郎師ほかの三味
線。囃子（笛、小鼓、大鼓、太鼓）が入
る。

やはり力強い大薩摩に始まり、六下り、
本調子、二上りと、東京の上水道の水源
をその・みなもと」から・六所まつり」
の布晒しまで、変化に富んだ曲調を、福
田師の情緒の深い唄を得て、前村先生が
意気高く弾く三味線が観客の耳を惹きつ
けた。

前村先生は「まだお子様が小さいとき、
ご主人と連れだつてよく多摩川の溪流を
楽しまれたそうで、久しぶりに静寂な

山間の気分を求めて御岳まで足を伸ばされたそうです」とアナウンスがあったが、そのあたり、この曲と深くこころが通じ合う選曲の妙が活きたようだ。

「最後まで聞いていただいてありがとうございます。ありがとうございました」と、「閉会のことば」を日本医家芸術クラブ・邦楽部委員の川口 蚊子先生。出演者の高齢化を憂い、「来年



は公演が休みとなりますので、二年後にお会い出来ればと思います」……自分も小唄を教えているが、若い人に教えて底辺を広げて行きたいと語る。

進行は高橋妙子先生、司会は高松真弓氏。



▼ 長唄陣 主役をズームアップしました ▼

